

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	岐阜提灯：創作
Author(s)	徳廣，巖城
Citation	龍南， 1 7 9： 4 4 - 6 0
Issue date	1921-09-09
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7815">http://hdl.handle.net/2298/7815</a>
Right	

## 第三等當選

## 岐 阜 堤 灯

徳 廣 巖 城

空は来る日も来る日の暑さを暗示するかの様に、深淵の如く青く淀んでゐた。

太陽はまだ出てゐなかつた。蟬の聲もまだ聞えなかつた。肌のしつとりする様な、冷々冷々した朝の氣が、甘蔗畑や桑畑の上を靜に流れて來た。

幾組かの男女の群は、かうした空氣の中を、毎日毎日堤防工事に出掛けた。

二十日位前の或日の明け方に、一時間にも足りない間の暴雨風は到る所の堤防、堤防兼縣道といふやうな所に、破壊の跡を残して、悠々と立去つた。それは彼等の或る者、即ち眼定の職業のない労働者達には、仕事を與へ、生活を安定にした。彼等は汗みごろになつて砂礫を擔うた。●光の鋭い、色の黒い、縣廳の命を受けた指圖人は大きな聲で怒鳴りつけた。彼等は縦順に働いた。少しでも其の賃金の割増しを得る爲に、まめくしく働いた。そして彼等は役人の鋭い眼玉の前で、汗を流して、熱い息を吹いて無言の活動を續けた。

或る者は少しでも田畠を所有してゐる人達だつた。彼等には新しい苦しい仕事が加つたのは大頭痛だつた。愚痴をこぼしてゐても仕方がないので、デリ／＼と照りつける炎熱の下で、田の中一杯になつてゐる砂礫を運んだ。他の村から雇ひ入れた石工が、川に面した方に石垣を築いて、次第に高くなるに従つて、彼等の運んだ砂礫も其の嵩を増していつた。彼等には賃金を得る望みはなかつた。一日でも早く復舊することばかりを考へてゐた。然し、暑さは堪へられないばかりだつた。選ばれた世話人がどんなに勵しても、工事は少しも進捗することのない日があつた。そんな時に限つて、彼等はあの暴風雨を呪うた。日盛りには松の蔭などで、草履など造つてゐた、去年の夏を思ひ浮べてゐるのだつた。

縣道は兎も角、村人の堤防工事が情氣満々たる時にも、龍吉は荷馬車で石を運ぶことを止めなかつた。龍吉は堤防から雇はれたのだつた。彼には自分の賦役をつとめる田がなかつた。汗水流して働いた金も、親から貰つた田地も、到る所の茶店や酒屋で無くなつてしまつた。あとに残つたものは、多勢の子供だつた。親や兄は頻りに彼の不行跡を責めた。そして酒をいましめた。其の當時は、朝も暗い時分から家を出た。材木を高く積んだり、瓦を整然と並べたりした彼の荷馬車が縣道筋を往來した。そして、夕は望々として綿のやうに疲れて戻つて來た。馬もうつむいた儘、従いて歩いた。

やがて、時日の経過と共に、彼の心はあと戻りするのだつた。秋も末だつた。彼はN町への途中で、ある茶店に立寄つた。そこには白粉を塗りつけた若い女がゐた。

「酒を一本」

彼は元氣よく注文した。チビリチビリと飲みながら、其の芳醇な液体の中に、身も心も解け込ました。空になつた瓶の数が増すに従つて、彼の矮小なからだ中にアルコールが廻つていつた。

ドロンとした眼を据ゑて彼は女の方を見た。女は可笑しくてたまらないといふ風に、前掛を顔に被つて、白い首元を見せてあちら向いた。

「ねえさん。も一本、どうぞ」

彼が十本目を注文した時には、彼は舌は自由にきかなかつた。

彼は最後の一滴も餘さず飲み干した。アルコールの廻るのには、もう殆ど無感覺だつた。額の所に大きな筋が立つた。口のぐるりを手の甲で拭つて、よろ／＼と立ち上つた。

「ねえさん、どうぞ帳につけちよいて」

彼は頻冠りした。

「あゝ、ようござんす。……御用心して」

女の聲を聞き流して歩き始めた。二間半の縣道も、龍吉の千鳥足には狭かつた。蹣跚として行く彼の後姿は滑稽にも見えたが、又非常に危つこいものであつた。晩秋の乾いた風が、枯尾花の穂を吹き飛ばして砂塵をあげた時には、彼のからだは殆んど安定を失うてゐた。それでも粘り強く歩きつゝけた。

どうしたはずみだつたか知らない。龍吉は突然縣道の縁から這り落ちた。顔を枯草の中に臥したまゝ動かなかつた。大きな心臓の鼓動が浪打つてゐるのが見えた。

馬は停つた儘で主人の起き上るのを凝視してゐた。いつまで立つても主人は動かないので、愛想をつかして、

やけになつた様に音を立て、いばりした。はねがへる尿のしぶきが、夕陽を受けて虹色に光つてゐた。

十四五分も立つてからだつた。一人の男が通りかゝつた。其の男は龍吉を知つてゐたので、海鼠の様な體を引き上げて、荷馬車に乗せた。馬は主人を乗せた車を牽きながら、こつ／＼歩いた。

明るる日の午后、彼はやつと床を離れて、西日を受けてゐる縁側に物憂いからだを運んだ。からだのごこにも元氣といふ様なものは無かつた。只倦怠と疲勞とに充ちたからだど節々が、むづむづと痛んだ。

龍吉は前額にある生々しい擦り痕に氣がついた時、夢の様なあつたとも思へない記憶を辿つてゐた。あの時倒れた時までの事は臚にはあるが、思ひ出すことが出来た。而しどうして家に戻つたかは、如何にしても思出すことは不可能だつた。彼があゝの男に土間の中に連れ込まれた時、不甲斐なかつた妻や、おづ／＼と恐れてゐた子供達を、嘲りを含んだ様な顔で見廻はした事も、今から思つて見ると恥しい氣持がしてならなかつた。

龍吉は希望も何にも失うた様子で、夕陽の中に坐つてゐた。井戸端で彼の妻が、米を研ぐ音に交つて、脊に負うてゐる子供のむづかる聲が氣持悪く聞えて來た。

赫變たる太陽は容赦もなく降りそゞいだ。萬有は死んだ様に靜かだつた。

堤防工事の人々は川の流に足を浸したり、稗になつて泳いだりしてゐた。

龍吉は相變らず精が出た。石一個について七錢で、一度に九個位づゝ運んだ。一日には少くとも六度は往復したのだつた。四圓近い金は日々彼の懷の中に這入つて行つた。

「今は働きの多いで、働きたやすもや、金は何ぼでも取れやんす」。龍吉は酒屋に這入つて、焼酎をチビリチビリやる度にこんな事を話してゐた。

彼が石を積み込む所は、丁度酒屋の角の所だつた。役に出てゐる逞しい男達が、川口で割つた角々しい石を船で運んで、それから其處まで持つて來てあつたのだつた。割れ口の青い石が道一杯に置き並べられてゐた。彼は家の陰の所へ馬を繋いでおいた。それから男等に手傳つて貰つて、大きな石を車の上に乗せた。

「あんなにこまい男が、ようも力が出るものぢや」。

酒屋の井へ水を汲みに來た年増の女達は話してゐた。實際彼のからだは小さかつた。而し渾身の力が彼の短軀から迸り出てゐた。其の力が凝固して、彼の額や脇の下の汗の玉となつてゐる様に見えた。彼が足を踏ん張ると、つぎ廻はした縞のズボンが、メリ／＼と裂けることもあつた。

「暑いに精が出るのー」通りかゝる人は皆言つた。部落の中でも此の炎天に働いてゐる者はそんなに無かつた。働いてゐる者があつても、彼等は晝寝するよりは宜いといふので、陰の下で裏仕事などしてゐるに過ぎなかつた。

「九つも積んで………ゑらいよ」

「二百貫はあるだらう」

石をかきに來た男等が、棒を杖にして頻りに感歎して話し合つてゐた。

「まだ、積みば積めるけんぞ、馬がこたへるんで」。

龍吉はまだ餘裕を示さうとする様に、獨言の調子で話した。

石を動かない様にしてから、彼は馬を牽いて來た。河原毛の逞しい馬だった。脊には菰の古いのを被うてあつた。そして馬を車にくくり付けた。

「ホイー、ホイー」

咽喉が痛みはしないだらうかと思はれる瘡な聲を出して、龍吉は馬に元氣をつけた。自分も車に縛りつけた綱を肩にかけて引いた。

馬は齒を喰ひしばつてゐるやうだった。肩先から頭のあたりを延ばして、前肢は屈めて、後肢はあらん限りの力で踏ん張つた。腿から脛のあたりの筋肉がビリ／＼と動いた。

「そりやー」

彼は今一息氣合をかけた。と定著してゐた車はごろごろと動き出した。馬の脊からは一頻り汗が流れた。少し行くと其處はすぐ家の角だった。殆んど直角的に曲つてゐた。彼は手傳つて貰つてやつと廻はることが出來たそれから縣道へ出る迄の七八町の路は村の間を曲り曲つて縫うてゐた。到る所に石の凸凹があつたり、小さな溝があつたりした。其の度に車は大きく揺れた。馬は縣命の力を絞り出した。

或る日だった。龍吉は家へ歸へつて晝飯をすましてから、川の入江に近い石垣の上に腰を下ろしてゐた。頭の上では大きな松が、其の肌で蟬の鳴くのにかまして、海から吹き入れる風を受けて音を立てゝゐた。左の方は陰氣な竹藪になつてゐて、餓え疲れた蚊が弱りきつた哀れな聲を出してやつて來たりした。

龍吉は肌を脱いだ。日にやけた肉付のよい脊が見えた。そして形の如くやつてゐた鉢巻をとつて肌の汗を拭

ふた。酒飲んで禿げた頭が、之も陽に燻けて光澤を呈してゐた。

松の蔭になつて、芦の一面に生れた所へ放して置いた馬が、頻りに芦の葉を食ひながら、うまさうな齒ぎれのよい音を立てゝゐた。龍吉はばんやりとその方を眺めてゐた。

そこへ堤防の世話人がヒョッコリやつて來た。丈の高い男である。冠つてゐた深い笠をとりながら、

「暑いよー」と龍吉に言つた。

「お暑うござんす」龍吉は黄色い齒を出して挨拶した。

世話人はすぐ近くの石の上に腰を下ろした。暫く二人の間には沈黙が続いた。川の口で岩を割る石工の鈍の音が、眞晝の暑さをいやが上にも増させる様に響いて來た。

「馬の飼ひ料もだいぶ要るぢやらう」

世話人が突然云つた。

「わゝ、まあ、出来るだけ惜しまんで食はしよるが」

龍吉の答には、明に力の強い馬を誇るらしい口調が交つてゐた。自分等一家が全くあの馬のお陰で、生活を續けてゐるのだといふ事を、今更の様に感じた。

石工の鈍の音がやんで、ダイナイトの岩を破壊する大きな響が鳴り渡つた。と、あとは又暑いもと通りの夏の眞晝にかへつた。

「言ひにくい事ぢやが」

世話人は口ごもりながら言ひ始めた。



「何ですぞに」

龍吉は氣輕に答へた。其の瞬間、話の内容がどんなだらうかといふ考へが、頭の中で閃いた。

「まことに云ひにくいことぢやが」

「どういふことぢやろー」

「アノー石の運賃のことぢやが」

「わゝ」

「前に一つ七錢と決めたけんど、あんまりお前の方で馬鹿げに金をとられちや、堤防の方が持てんよになるぢやに依つて、まあ五厘だけ引いては呉れまいか」

「……」

「なんなら、二厘五毛でもわゝが」

「……」

世話人は返答を促す様に、唾をぐつと呑みこんだ。

龍吉の顔には明に暗い影が漂うた。一つに五厘でも、たいした金高が今の収入から減ることゝなると思つて見た。向ふの仕打があまり利己主義であると思つて見た。

「そりや、堤防全体の望みですらのーシ」

「無論さうとも」

「そんなら、なせはじめから、さうと決めて呉れなかつたらうに」

「堤防の方も色々経費が入るし、ちつとづつでも節約せんと、しまひまで續くかどうかわからん」  
「そちらもそちらですが、こちらもちらですからのーシ」

「一日に四圓もとつて見よ、米にしたら一斗五六升もあるちやいか」

「馬も飼はねばならんし」

「馬を飼うても残りはたいしたものぢや、縣道に出てゐる人夫等はほんの一圓と少しとぢやぞ」

「それは、さうぢやが……」

龍吉はまだ何か云はうとしたが、ふと或る考へが頭を掠めて通つたのを知つた。今迄の事はすつかり念頭から離して、一つの事を深く考へこんでゐた。彼は胸の中で或る計劃を立てると、横腹の藪蚊に食はれて紅くなつてゐる所を掻きながら頭を上げた。其の顔には、さつきの暗い影はもう消えて、明るい色が漲つてゐたやゝ皮肉に近い微笑をすら浮べてゐた。

「わ、よござんす。六錢五厘で引き受けませう。」

「どうぞ、さうして呉れるか。實際都合が好いが」

「承知しました。」

「どうも、濟まんことを言つて……」

「どうして」

其の後で、世話人と龍吉とは堤防の事やら、村の最近の出来事やらを話し合つてゐた。二人の顔には夫々異つた満足の光が輝いてゐた。

明くる日からだつた。大きな石を十三も積んだ龍吉の荷馬車が、村の道をごろ／＼と轆りながら、通つて行くのが見えた。

今迄よりも一層はげしい、血眼になつての労働が続いた。其の労働が強ければ強い程、龍吉は其の懷の中が次第に暖くなつて行くのを意識した。それと同時に、享樂的な氣分がむら／＼と起つて、彼の心はやゝもすれば、あの夏雲の様に今にも崩れさうになつて來た。重い荷物を引いて、一足一足踏みしめて、遅々として歩く馬を見てすら、一種のいら立たしさを禁ずることが出來なつた。

「馬鹿ッ。」

龍吉は大きな聲で怒鳴りたいのを、あらん限り堪へてゐる様に、むつ／＼とした顔をして例の如く縣道筋を歩いた。一方では馬は根氣よく從順に力一杯で動いた。かうして動くのが宿命であるとあきらめてゐるものの様に、耳聾を神經質に動かしてゐた。

「命が縮まりさうだ。」

龍吉は明らかに、一つの安易へと血路を切り開きたいものだと思案してゐた。さうなると、抑へても抑へても果しない享樂欲がこみ上げて來るのだつた。隣村の淺黄暖簾のかゝつてゐる小料理屋が、いち早く眼前に展開した時、只それだけで、彼は一寸満足の表情をあらはしてゐた。

龍吉が六度目の運搬がすんで歸へる時には、夏を忘れる様な涼しい風が玉蜀黍の葉を揺がしてゐた。盆の近づいたにも無關心らしく、涼しくなるのを見計つて來たらしい人々の頭が、桑畑の中にもちらほろ見えた。

道の真ん中で立話してゐる女の話題も、秋蠶の繭の價のことらしかつた。太陽はもう小半時の努力で西の山に隠れやうと焦つてゐるのだつた。

此の日に限つて龍吉の車は村への路を戻らないで、隣村への一本道を進んで行つた。白くつづいた道のはてに隣村の人家が見えてゐた。白々とした此の道!! 龍吉は久し振りで歩く快感を味ひながら、愛想のよい女將さんや、日本酒や麥酒の香りを漂はしたあまり奇麗でない座敷など想像してゐた。

「明日の朝になりや又働くまでよ、一晚位勝手に遊ぶのもね、や。」  
強いて理窟をつけて彼は急いだ。

龍吉が小料理屋の前で馬を停めた時だつた。

「龍さん、一杯やらんかね」

暖簾の中から呼ぶ者があつた。龍吉は其の聲で、同じ仲間の仙之助であることを知つた。仙之助はよそ村の男だが、今では家族を引いて此の村に流れて来て、矢張り荷馬車渡世をしてゐた。

「オ、今日は一杯やるつもりで、來たよ」

龍吉の聲は如何にも嬉しさうだつた。馬は家の横の空き地に繋いで、車は店先へ片寄せて置いた。あたりに是最早蚊が我物顔に生きた物を目かけては攻め寄せて來た。

「今日は」と云ひながら龍吉は鉢巻を解いた。「今日は」と云ふにはあまりに夜らしい氣分が漲つてゐた。磨いたばかりのランプのホヤからは美しい光がバツと出て、酒で赤らんだ仙之助の顔を氣持よく照らしてゐた。

「龍さん、お久し振り！」

お女將さんは座蒲團をすゝめながら言つた。

「大分久しう來らつたよ」

と言ひながら素足の草鞋を解かうとした。ふと仙之助を見ると、紺の脚絆がけであるので、一寸變な壓迫を感じてそれをやめた。

「龍さんは近頃ゑらい金儲けぢやさうで」

お女將さんと、仙之助とは聲を揃はて言つた。仙之助の面にはかすかながらも嫉妬とでも言ひたい、妙な氣持をあらはした色があらはれてゐた。

「なにたいしたことはありやせん、而し食うにはこまらんよ。今時働いて食へん者は子供か、年寄か、かたわぢやけんぞ。」

「ちつとは遊んでも、お前さん、氣晴しになつてよいよ」

お女將さんは物質欲に輝いた眼を睜いて喋舌つた。

龍吉が、家に戻つたのは、其の日から四日目の午後三時すぎだつた。村では陰歷十五日の盆で、大抵の精農家も今日ばかりは靜に休んでゐた。

龍吉の後には、此の間までゐた馬とは違つた、大きなことは大きいが、ごくことなく間の抜けた様な栗毛の馬が、うつむきながら車を引いて従いてゐた。彼は車をいつもの通り酒屋の角の所へ置いて、馬ばかり引いて

家に歸つて行つた。

馬を馬小屋に入れると、龍吉はあたりをぐるりと見廻はした。馬に食はず様なものは殆んどなかつた。此の間刈つて來て置いた草の枯れたのが、少しあつたので手で掻き集めて、はみ桶の中へ入れた。そして疊のあたりを軽く撫でた。今までは違つた住家へ這入つて、馬は満足さうに口を鳴らしてゐた。

龍吉は土間へ這入ると草鞋をぬいた。齒の摺れた下駄を提げて、流し元の方へ足を洗ひに行つた。其所では彼の妻が、夕食の仕度に米を研いでゐた。乳の様な研ぎ汁が桶の中に溜つてゐた。其の脊では末の子が首のあたりを縛られて、負はされてゐた。

龍吉は一言も言はないで足を洗つてゐた。

「お前さんは、二三日どこへ行ちよつた。兄さんも心配してさつき來てゐたが。」妻は云つた。

龍吉は矢つ張り黙つてゐた。妻もそれきり黙つてしまつて米をこし／＼研いでゐた。

龍吉は座敷へ上るとすぐ、汗臭くなつた襯衣を脱いで、褲一つになつてごろりと仰向けになつた。急に眩暈を感じたので目をつむつた。暫くの間はむさ苦しい部屋の中で、彼の心臓ばかりが、絶え間なく動いてゐる只一つの物であるやうだつた。

彼はふと、妻が米の研ぎ汁を抱いて馬小屋の方へ行くのだらうと思ふ足音を聞いた。案の通り桶から桶へ、汁を入れてゐる音がザーと聞えて來た。

「とう／＼見られたわい。」と心の中で思つてゐる時に、

「ありやッ。」といふ妻の聲を聞いた。馬に就いて瘦せてゐる、肥れてゐるといふ外、何等の智識もない妻で

さへ、一目毛色さへ見れば、馬が換はれてゐるのを感付いたなど思つた。自分の所有してゐる馬を自分が換はるのに差支へはないとも思つた。而し何だか先の馬が懐しい様にも思はれた。

妻の足音が、家の方に歸らないで外に出て行くのを聞いた。龍吉は目を見開いて、煤けた天井を見た。そして二三日此の方、仲間の仙之助との間に起つた事など考へてゐた。

あの日龍吉は仙之助と話してゐる中に、話題は馬の方に移つて行つた。仙之助どうかして龍吉の馬と換は様と焦つた。頻りに酒を勤めては、自分の馬を賞めた。其の裏面には仙之助の馬は片目大分見ねにくいといふことは龍吉も知つてゐたので可成り仙之助の方に引け目があつたのだつた。若くて力強いといふことを盾として、龍吉の馬は老朽に近いので、今の様な劇しい働きをすると、近い中には役に立たなくなるといふことを力説した。龍吉ははじめの中は、頭を振つて拒んでゐたが、仙之助の口説きが熱意を含んで來れば來る程、彼の心は次第に平靜を失つて、全く酒の虜となつてしまつた。馬なんかどうでも宜い、瞬間々に満足さへ出來れば宜いと思つた。今まで横にばかり振つてゐた頭を、前後に振つた時には、片目の馬は龍吉の所有となつて、仙之助は無上の喜びに浸つて、盛に酒をあはつてゐた。

「龍さん、うんと飲まう。馬を換はるのはお互の利益ぢやから。」

「飲まう。うんとやらう。」

二人はこんな事を言つて、それから三日間飲み續けた。肉は爛れ、骨は溶けて了つたかと思ふ様な、物憂さを抱いて龍吉は歸つたのだつた。

バタ／＼といふ足音が外に聞えた。

「仙之助の馬なら、片目の筈ぢやが。」

兄の聲らしかった。憤怒に燃えてゐるらしい口調を聞くと、龍吉は不快を感じた。

「まことに片目にはらん。」妻の聲らしかった。

「こんなに目の玉が白みがかゝつちよるもの。」兄は説明する様に言つた。其の様子から察すると、兄と妻の外におやちと隣人の二三人も来てゐる様だつた。

龍吉は障子一重の外の、馬小屋の前に立つて話し合てゐる人々の聲を聞いた時、寢返へりをした。罵詈を連ねてゐる人々の會話は、情容赦もなく鼓膜に響いてゐた。

「龍——龍——」

兄が呼んだ。身動き一つせず彼は黙つてゐた。

「龍——龍——」

二度目に呼ばれた時には嫌々ながら起き上つて、洗つた古シャツ一つを引つけて縁側に出た。もう夕暮の光が庭の中までも這入り込んでゐた。

どや／＼と縁側に打寄せる人々を見た時、何だか悲しい氣持がしてならなかつた。

「馬換れたね。」兄は徐に切り出した。おやちは好人物の顔に當惑の色を浮べて徒跣で立つてゐた。息子等二人の會話に注意を集中してゐた。

「仙之助と換はたらう」

「わ、」



あんなポロ馬と換えてどうすれや、片目ぢやないか。さきの馬のお影で飯か食へてゐた癖に……」

「……………」

「酒を飲むなど、あれ程云ふによるに、馬鹿に金持たすと、ぢきあれぢやから困まる」

「……………」

「あんな馬ぢや、早、明日からの働きにさしつかへるぢやないか、少々力が強くても、石にでも躓いて足も折りや、とるかへしはつかん」

兄は苦い事を疊みかへして浴せかけた。龍吉は下を向いて冷汗を流してゐた。少々位の享樂の跡方はもうどこにも見られなかつた。妻は脊の子供を揺りながら、龍吉の方を見つめてゐた。おやぢは一寸悲痛の色を帯びてゐた。

「俺が仙之助と談判して馬を取りかへしてやらう」

兄は決然と言ひ放つた。恰も侮辱されたのを憤つてゐるやうに。龍吉はちよいと顔を上げた。あり／＼と後悔の面持が讀まれた。さうして呉れ、ば宜いがとも思つたが、大概は不成功だらうと想像した。又馬を換へ戻すにしても、相當の金も要るが、其の金は兄が出すだらうかとも思つた。

「仙之助は中々返へすまい。」

龍吉はやつこのことでこれだけ言つた。仕方がないがら放つて置いてもよいが、まだあの馬に未練があるのだと言ふらしかつた。

「何！理窟はこもらにある。人が酒に酔うてゐるのにつけ込んで換わるのぢやもの、だまして換へたも同然

よ」

「しかし」

「理窟はこちらにあるんぢやから、腰が強いよ」

「金を大分出さんでは仙之助が承知しまい」

「そりや、ちつとは出さんで、向ふさんも承知しまいさ。馬鹿は右を向いても、左を向いても損ばかりするから困まる……………兎に角、俺が行つて取りかへして來う」

兄は縁側から離れた。龍吉はそうなるのも宜いが、今度仙之助と逢うた時には調子が悪いと思つた。

「何分頼みます、兄さん」

妻は眞劍になつて兄に願うた。龍吉も「どうぞ」と口の中で言ひながら撥を合はした。

「自轉車で早速行くことゝしやう。」

「晩くなつたのにまことに御苦勞さまで」

妻は又願ひを強める様に云つた。

あまり丈の高くない兄の姿が門口から消れた。おやちも隣人も後に従つた。

あとでは、龍吉と彼の妻とがボンヤリと夕暮の中に立つてゐた。一種の淋しさが罩めてゐた。

龍吉はふと、今年は去年の秋熱病で死んだ、九つになる娘が初盆なので、秋草の模様のついた岐阜堤灯が軒先で揺れてゐるのに氣が付いた。妙に涙ぐましい心になつて、あのすき通る程薄い紙で拵らへた、まだ火の點つてゐない悲しい堤灯を眺めてゐた。